2024 年度国際交流事業

―京師南奥実験学校と恵州実験学校の修学旅行ボランティア活動―

酒井　悟

1　活動について

11 月に，本教職大学院は，選択授業「グローバル教育実践演習」で中国を訪れ，学びを深めてきた。その授業には参加できなかったが，中国に関心を高めていた院生から，機会があれば中国の方と活動をしたいという声が出ていた。

１月に，南奥実験学校と恵州実験学校の子どもたちが修学旅行で新潟を訪れた。そこで，筆者と希望していた教職大学院生がボランティアとして活動に参加した。このボランティア活動を教職大学院の国際交流事業に位置付けて実施した。

2　活動

（1）ねらい

〇新潟大学教育学部と連携協定を結んでいる南奥実験学校と恵州実験学校との交流を行い，相互の連携及び教育活動を一層深めていくことに資する。

〇南奥実験学校と恵州実験学校の修学旅行の活動に教職大学院生が関わることを通して，国際交流に対して関心を深める。

（2）訪問者

呉忠魁 先生

南奥実験学校と恵州実験学校教員

北京師範大学珠海分校教員

南奥実験学校と恵州実験学校の子ども 56 名

（3）参加者

教員　酒井悟

院生　江畑正平　小黒大介　小川彩

早川英佑　山﨑翔泰　山本友里

他院生家族　３名（小・中学生）

（4）期日

令和 7 年 1 月 20 日（月）

（5）活動内容

ア　開会式

開会式，予定にはなかったが，教職大学院参加者を紹介させてもらえる場をいただいた。院生が，自己紹介をした。お互いに顔を合わせる場をいただけたことで，修学旅行で参加している子どもたちとの活動もスムーズに始められることになった。

イ　折り紙，切り絵づくり

最初に，折り紙と切り絵づくりを行った。折り紙はお互いの国にある文化であるが，作るものや作り方も異なっていた。互いに紹介し合い，文化交流ができた。

ウ　うどん作り

昼食のうどん作りを行った。ここでは，粉から作る。粉に水を入れ捏ねる工程から始まり，広げ，足で踏む作業を行った。特に，食材を踏むという工程に，修学旅行で訪れていた子どもたちは驚いていたようである。その後，のばした生地を切って麺にしていった。天ぷらそばに仕上げてもらったが，天ぷらを残す子どもが多かったのは，食べ慣れていなかったためだと思われる。食事の仕方も，日本の学校とは異なり，準備ができた子どもたちから食べていた。「食」に対する考え方も文化も異なることに気付いた。

エ　雪遊び

修学旅行で訪れていた子どもたちが暮らす地域には雪は降らない。雪は珍しいものであり，雪の感触，冷たさを感じていた。外に出るや

否や雪の中に駆け込んでいった。この辺りは，正解共通の様子が見られた。

オ　茶道・花道体験

日本で文化として位置付いている「花道」と「茶道」を体験した。一緒に活動しながら，専門家の先生方の説明の仕方のうまさを感じた。院生も，スマホの翻訳機能を使ったり，先生の動作を動画で撮影しそれを見せたりしながら説明をしていた。子どもたちは，何をすればよいのか，どのようにすればよいのか，院生の声も頼りにしながら活動をしていた。

（6）閉会式

一日の活動を終えて，閉会式となった。わずか一日の活動ではあったが，得るものはたくさんあった。文化や風土が異なっても同じにして

いるコミュニケーションの大切さや，文化や風土が異なるからこその見方や考え方の違いなど，接して見なければ分からないことである。参加した院生の関心は，一様に高まった。

３　参加院生の感想

江畑 正平　Ｍ１（五泉市立川東小学校）

「子どもたちから学んだこと」

子どもたちと目が合うと，椅子を引き椅子を手で指してくれた。とても嬉しくなり，椅子に座った。温かい気持ちで交流が始まった。

折り紙での交流。折り紙がなかなかうまく折れずにいると，そっと手を差し伸べ，難しいところをしてくれた。犬が完成すると互いの作品を見せて喜び合う。

めったに体験できないうどん作り，工程が進むたびにみんなで喜ぶ。ガッツポーズも出てくる。楽しくなり，目が合うと自然とハイタッチ。カメラを向けられると，一緒にピースをして笑顔で写る。幸せな気持ちになる。

子どもたちの姿から，グローバルな人間について考えてみた。チャレンジ精神，相手のことを考える気持ち，様々な形でコミュニケーションをとろうとする意欲があること。そして笑顔で周囲に接し，多くの方々を幸せな気持ちにできること。子どもたちってやっぱりすごい！

小黒 大介　Ｍ１（五泉市立村松小学校）

「言葉は通じなくとも… 」

中国の子どもたちとうどん作りや生け花を通じて交流する貴重な体験であった。最初はスマホの翻訳機能に頼る場面もあったが，活動を進めるうちに，表情や身振り，簡単な日本語や英語を交えたやり取りが増え，自然と笑顔が広がった。特に印象的だったのは，言葉が通じなくとも一緒に作業する中で，互いに共感し合えた瞬間である。うどんを包丁で切り，麺の端を両手で持ちくるくる回しながら太さを調整する活動はどの子も笑顔で溢れ，一体感を感じた。

この経験を通じて，異文化交流は文化の違いを意識することではなく，共に行動し，楽しさを分かち合う中で自然と築かれるつながりが大切であると感じた。グローバル社会を生きる子どもたちにとって，こうした交流の機会が未来につながる大切な学びになると思う。来年度もぜひ息子とともに参加させていただきたい。

小川 彩　Ｍ１（江南高等特別支援学校）

「学校教育と国民性」

子どもたちとの活動を通して，中国での教育においてどのように国民性を育てているかを垣間見た。友達と関わる子もいれば，一人で没頭する子もいる。日本人である私にも興味があれば中国語で話しかけ，英語で答えるなどのやりとりが行われた。つまり，主張がはっきりしている。自分がやりたいことは貫き，興味があるものには自分から関わる。それが許される環境であった。それは教師が設定したグループワークではなく，児童の主体性を引き出す関わりであった。生け花体験の時には具体になった。子どもたちは，日本語の説明で理解が難しい中，各々作品に表していた。雪遊びの時には，雪山に飛び込む子，そおっと歩み寄る子，じっと眺める子。教員は子どもから少し離れて写真を撮っている。日本では子どものすぐ傍で答えや正解を教えたがり，活動をさせたがる。教え込みではない自由な中で感性を育てることは，自分の主張ができる力を育てているように感じた。

早川 英佑　Ｍ１（新潟市立青山小学校）
「言葉を越えた交流＝協働体験」

一緒に折り紙，うどん作り，雪遊び，茶道，生け花を体験することができた。日本の小中学生も数名が活動に参加しその様子を見ることができたことが今回の学びへとつながった。中国の子供たちは，我々日本人に対して英語を用いてどんどん話し掛けてきた。一番驚いた場面は，日本の子が「うーどんみぇんはうちーま」と中国語で質問をしている場面だ。相手を見て，自然に自分の言葉で伝える姿を見た。我々大学院生が，翻訳アプリを片手に，必死の英語や全力の日本語で伝えようとしていた姿とはまるで違う。子供同士の自然なやり取りに驚かされた。一方で，言葉がなくても活動できた場面もあった。一緒に雪だるま作りをした時である。「スノーマン」言葉はそれだけで十分である。一緒に頭の部分を胴体にのせたり，落ちている葉っぱや松ぼっくりで顔を作ったり，掛け声で記念撮影をしたり。一緒にやるということが大事であると実感した。

山﨑 翔泰　Ｍ１（阿賀野市立水原小学校）
「中国の子どもたちと関わっての感想　先生方と話してみての学び」

国際交流という視点で，今回の交流会に参加させていただいた。言葉が通じないという状況に不安を覚えつつも，ワクワク感を感じていた。実際，子どもたちの前に立ち自己紹介をした時，「何をどのように話そうか」と考えている自分がいて，「早く話したい，伝えたい，聞きたい」と自然に思っていた。テーブルにつき中国式折り紙やうどん作りを体験している時は，翻訳アプリや片言の英語を用いて気持ちを伝えることを楽しんでいた。また，折り紙という文化の違いに触れ，「これはどうやるの？」「そんな遊び方をするんだ！」と驚きを隠せなかった。

子どもたちと関わる中で，国は違えど子どもたちの笑顔のエネルギーは変わらないと強く感じた。違うのは行くまでの私のように身構えてしまう大人の気持ちだけであろう。国際交流を通して，自分の世界が広がった。このような機会を与えていただいた方々に感謝の意を表したい。

山本 友里　Ｍ１（新潟市立曽野木中学校）
「国際交流とは」

初めて中国の子どもたちと接する機会をいただいた。言葉の壁がもどかしいと思ったのも束の間，折り紙，うどん作り，茶華道体験…中国語と英語を交えた子どもたちとの交流は非常に濃密なものであった。ただ，一番多用した言語は日本語であったと思う。ある子が作った結んだうどんが私のお椀に入っていたことを全力の日本語で伝えた際の，その子の笑顔が忘れられない。互いの思いが通じ合った瞬間であった。これが国際交流か。きれいな中国語も卓越した英語も必要ない。言葉が通じなくても，国際交流が成り立つことを実感した。学校の中の学びで閉じていては，国際交流への道のりは遠い。一歩外の世界に踏み出してみること，実際に体験してみること，これが国際交流へとつながっていくように思う。

今回中国の子どもたちと触れ合ったことは，今後に活きる貴重な「体験」となった。関わっていただいた方々に感謝を申し上げたい。